

2024 年度 博士フォーラム実施報告書

博士戦略会議 2024 in Fukuoka ～辿る軌跡と切り拓く未来～

開催日：2024年12月6日（金）

開催形式：対面とオンラインのハイブリッド

会場：九州大学西新プラザ 会議室 AB

幹事校：九州大学

目次

1. はじめに	2
2. プログラム	3
3. 参加者	4
4. 基調講演：博士人材の活躍促進に向けて（文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課 人材政策推進室長 高見 暁子氏）	5
5. 招待講演：博士が歩んできた道，博士への期待	6
5.1. 星野 友氏（九州大学大学院工学研究院応用化学部門 教授）：	6
5.2. 石濱 航平氏（NOVIGO Pharma(株) 代表取締役）：	7
5.3. 恩賀 万理恵氏（Vice President, Customer Experience Group, WHILL Inc.）：	7
5.4. 岡本 尚也氏（(一社) Glocal Academy 代表）：	8
5.5. 松岡 秀行氏（(株)日立製作所 基礎研究センタ 技術顧問 兼 日立東大ラボ長）：	8
6. パネルディスカッション（ファシリテータ：(株)リバネス 重永美由希 氏）	10
7. アンケート結果	12
7.1. 事後アンケート	12
8. おわりに	23
添付資料	24
A-1. 参加者名簿	25
A-2. フォーラムの様子	29
A-3. 周知ちらし	32

1. はじめに

一般社団法人八大学工学系連合会（北海道大学，東北大学，東京大学，東京科学大学（旧：東京工業大学），名古屋大学，京都大学，大阪大学，九州大学）は，八大学に属する9工学部，及び25研究科・研究院で構成し，互いに協力して諸課題の課題抽出や情報交換を行いながら，課題解決や対外的な意見発信を行ってきた．この連合会事業の一つとして，博士フォーラム事業があり，八大学が持ち回りで開催している．2024年は，九州大学が幹事校となり，【博士戦略会議2024 in Fukuoka ～辿る軌跡と切り拓く未来～】というテーマでフォーラム事業を行った．

現在，日本の博士号取得者は人口100万人当たり120人程度と少なく，さらに主要国の中では日本のみ減少傾向が続いている．最近はこの現状が問題視されつつあり，文部科学省主導のもと，大学院教育の改革や学生への支援強化によって博士学生数を増やそうとする働きかけが行われている．その一方で，研究者の現状に対する世間一般の理解は十分とは言えず，また，博士学生が自身の研究の本質や社会への更献度，さらにはその後のキャリアについて疑念や不安感を抱くことも少なくない．本フォーラムでは，文部科学省の取り組みについて紹介いただいた後，アカデミア，スタートアップ企業，一般企業など様々な分野において最前線でご活躍されている5名の博士号取得者に，これまで歩まれて来た道やこれからの博士への期待についてご講演いただいた．さらに，パネルディスカッションを行い，学生の意見も交えつつ，様々な立場から見た博士の可能性・有用性について議論した．

2. プログラム

- 13:00 開会
開会の挨拶 九州大学大学院工学研究院長 山本 元司
主旨説明 九州大学大学院工学研究院 渡邊 聡 (第1分科会主査)

- 13:15～14:00 第一部：基調講演
講演タイトル「博士人材の活躍促進に向けて」
文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課 人材政策推進室長 高見 暁子 様

- 14:00～14:10 休憩

- 14:10～15:50 第二部：招待講演
テーマ：博士が歩んできた道，博士への期待
・九州大学大学院工学研究院応用化学部門 教授 星野 友 様
・NOVIGO Pharma(株) 代表取締役 石濱 航平 様
・Vice President, Customer Experience Group, WHILL Inc. 恩賀 万理恵 様
・(一社) Glocal Academy 代表 岡本 尚也 様
・(株)日立製作所 基礎研究センター 技術顧問 兼 日立東大ラボ長 松岡 秀行 様

- 15:50～16:00 休憩 (会場設営)

- 16:00～16:50 第三部：パネルディスカッション
テーマ：過去に戻ったら，もう一度博士に進学しますか？
・パネリスト：星野友様，石濱航平様，恩賀万理恵様，岡本尚也様，松岡秀行様
・ファシリテーター：株式会社リバネス人材開発事業部 重永 美由希 様

- 16:50～17:00 クロージング
閉会の挨拶 九州大学大学院工学研究院 渡邊 聡 (第1分科会主査)

- 17:00～17:05 写真撮影

3. 参加者

●学生	<u>計 58 名</u>
九大幹事（対面）	13 名
協力学生（対面）	15 名
一般対面参加	13 名
オンライン参加	17 名
●教員	<u>計 19 名</u>
対面参加	14 名
オンライン参加	5 名
●登壇者	<u>7 名</u>
●八大学連合会事務局	<u>2 名</u>
●九大事務関係者	<u>11 名</u>
●その他（他大事務等）	<u>計 11 名</u>
対面参加	2 名
オンライン参加	9 名

合計 108 名

参加登録者は 108 名であった。巻末（添付資料 A-1）に幹事学生名簿ならびに参加登録者名簿を示す。

4. 基調講演：博士人材の活躍促進に向けて（文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課 人材政策推進室長 高見 暁子氏）

第1部の基調講演では、文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課人材政策推進室長の高見暁子様をお招きし、我が国の現状の博士の状況を鑑み、これからの博士の活躍や博士への期待についてご講演いただいた。この基調講演を通して、社会が博士学生に対して何を求めているかを把握し、それを踏まえた上で各個人がどのように期待に応えていくかを考える契機とすることを目的とした。

●講演内容

博士課程修了者の多様なキャリアパスの実現を目指した取り組みについて紹介された。特に、博士号は特定の専門分野に限定されるものではなく、例えば国際会議や意思決定の場において、信頼性の証明としての役割を果たせることが強調された。

現在、日本では人口100万人当たりの博士課程修了者数が123人と、先進国の中で下位に位置している。今後、国際競争力を向上させるためには、理系のみならず人文社会系の博士人材を増やすことが重要になる。一方で、博士課程進学を断念する要因として、主に経済的な問題や就職への不安が挙げられている。

これらの課題に対し、文部科学省として、産業界と大学の連携を強化し、長期ジョブ型インターンシップの活用や公的機関での採用拡大を要請していることを紹介された。また、奨学金制度の充実にも力を入れており、次世代研究者挑戦的研究プログラム（SPRING）採用学生は過去4年間で1.5倍に増加している。また、次世代AI研究者やリサーチ・アドミニストレーター（URA）人材の確保といった新たな体制整備も行っている。

さらに、学生と企業をつなげる具体的な取り組みとして「未来の博士フェス」などのイベントの実施も紹介され、博士課程学生のキャリア支援が広がりを見せていることが紹介された。

●質疑応答

Q1. 博士後期課程の学生が増えることで研究費は減るのではないかと？

A1. 研究の質が確保できるよう、研究費の予算を増やしていく予定である。

Q2. 経済的な理由で就職を選ぶ修士学生も多いため、博士人材を増やすためには修士課程から支援するべきではないかと？

A2. 博士課程からが研究者の卵であると考えており、修士課程からの支援は難しい。

5. 招待講演：博士が歩んできた道，博士への期待

第2部の招待講演では，アカデミア，企業，スタートアップ企業など，多様なフィールドで活躍されている先輩方をお招きし，各分野でのご経験や知見など，講演を通じて貴重なアドバイスを共有いただいた。とくに，様々なバックグラウンドを持つ講演者の方々から多角的な視点を学び，博士号取得後のキャリア選択や博士課程で身につけるべき能力をより明確にすることを目的とした。

5.1. 星野 友氏（九州大学大学院工学研究院応用化学部門 教授）：

●講演内容

星野先生より，学生時代から博士号取得後に至るまでの経験や，アカデミアで研究を続けるための姿勢，共同研究を進める上で必要となる能力についてお話いただいた。

星野先生は学生時代，研究に没頭する傍ら，投資会社や特許事務所で技術調査に携わり，特許の評価や契約実務を経験された。また，自ら実験教室を立ち上げ，営業力や交渉力，契約業務のスキルを身につけられた。先輩の勧めから博士課程に進学，博士号取得後，カリフォルニア大学アーバイン校にポスドクとして渡り研究を開始された。成果が出なければ解雇されるという厳しい環境で研究に取り組み，プラスチック抗体に関する研究を立ち上げ，成果を上げられた。また並行してビジネススクールで事業計画書を作製し，研究資金を獲得する方法を学び，実際にポスドク先の研究室や大学，企業，日本企業との共同研究に関する契約業務や交渉業務も担当された。この際，学生時代の経験が非常に役立ったというお話を伺った。帰国後は九州大学に着任され，プラスチック抗体の研究に加えてCO₂の回収に関する研究も開始され，2020年にスタートアップを設立された。

星野先生は，自らの経験を通じて，「学生時代に築いたネットワークは将来必ず生きる」「研究分野にこだわらず，興味を持ったことには何でも挑戦することが重要だ」と強調された。研究者としての成果に加え，柔軟な姿勢と多様な経験が，未来を切り拓く力になるというメッセージが伝えられた講演であった。

●質疑応答

Q1. 研究は30歳ぐらいまでがいちばんできるとおっしゃっていましたが，学生・ポスドク時代と大学教員になってからは，研究の濃さは異なるのでしょうか？

A1. もちろん，現在も研究をしっかりとしているが，研究の濃さの質が違う。博士学生やポスドクの時代は時間に無限があり，論文がたくさん読める，思いついた実験をすぐに実行できるなどフットワークが軽かった。そういう意味では，博士学生時代と今とは全然違います。

5.2. 石濱 航平氏 (NOVIGO Pharma(株) 代表取締役) :

●講演内容

石濱様ご自身の体験談を基に、研究への意識やスタートアップにおける課題について講演された。アメリカの短期留学中にリサーチプロポーザルを通して、企画力や特許について学んだ事、ビッチコンテストの中で恩師に出会った事、また、現在の自社における研究内容について述べられたが、その中で特に、研究者は分野に限らず、新たな興味をもった研究をやり遂げることやその判断をするために意思決定力を持つことが重要だと語られた。

さらに、スタートアップを経験して得た課題感として、技術の理解度や特許の取得、他社との競合といった実用化研究の難しさ、スキルのばらつきや採用の難しさといった人的問題、さらには人とのネットワークの構築や異分野との交流などを挙げた。

●質疑応答

Q1. 博士課程の研究をしながらスタートアップの準備をしていたとのことですが、それぞれエフォートは何割ぐらいでしたでしょうか

A1. 100:100 です。研究するために博士課程に入ったので研究はしっかりやる、時間を工面してスタートアップもしっかりやるという意識を持っていた。

Q2. 研究するために博士課程に進学したとのことですが、その後のイメージは当初はどうでしたか？今のように変わったのはどのタイミングでしょうか？

A2. 最初から博士課程への進学の意味が強かったが、当初は博士=研究のイメージを漠然ともっていた。博士課程でいろいろな話を聞く中で、進路がたくさんあることに気づき、リーディング大学院をきっかけに今の進路を選択するに至った。

5.3. 恩賀 万理恵氏 (Vice President, Customer Experience Group, WHILL Inc.) :

●講演内容

恩賀様はアジア人女性として海外での活躍を実現された経験について語られました。特に、携帯電話の普及も難しいアフリカなどの地域での活動を通じて、多様な文化や環境の中で成果を上げてきた事例を紹介されました。

博士課程時代には、さまざまな議論を重ね、多角的な視点で課題解決に取り組む力を養ったと述べられました。その経験が、博士号取得後のキャリア形成に大きな影響を与え、会社に入った後も新たな挑戦を求める原動力になったと語られました。

恩賀様の講演は、女性として、また博士号を持つ人材としてのキャリア形成の可能性と課題を具体的に示し、多くの聴衆に希望と勇気を与えるものでした。

●質疑応答

Q1. 博士の研究の途中で心が折れそうになったときに、なんとか乗り越えられたとのことですが、心が折れそうにな学生は多いのではないかと思います。そういった学生に、ここだ

けは頑張った方が良い、あるいはここは気にしないでいい、などのアドバイスをいただけますでしょうか。

A1. 心が折れそうになるのは普通。きっと周りのすごく見える人々もそうなので、そんなものだと割りきって、好きなことを、人と違うことをやればよいと思います。

5.4. 岡本 尚也氏（(一社) Glocal Academy 代表）：

●講演内容

岡本様より、『自己実現と博士課程という進路選択』についてご自身の経験や研究、Glocal Academy での活動を基にご講演いただいた。日本の学生における進路選択では、Personal Attitude（個人的姿勢）よりも Reference Group（帰属集団）が与える影響が大きな割合を占めること、また、その Reference Group から得られる情報には地域によって偏りがあり、都道府県別に見た大学進学率、特に女子学生における大学進学率では、都心部と地方では最大2倍程度も差があることを語られた。

研究を続ける上で行き詰まった時のルーティンを決めておくことは大事、シャワーを浴びたり一眠りしたりと、研究以外のことを怠けだと思わないでよいと語られていた。また、博士進学に不安を持っているかもしれないが、周りとは違うことは価値であり、深い専門性、深める方法を身につけられることは大きなメリットであるとも語られた。最後に、進路選択が正しいかどうかを決めるのは、選んだあとの自分自身の行動次第であると締められていた。

●質疑応答

Q1. 途中で、日本の場合はネットワーキングが弱いという話がありましたが、具体的にどのようなことを指されていますでしょうか？

Q2. 例えば隣の研究室が何をやっているか分からないということはよくある話。また、博士＝研究にとらわれすぎに思う。研究に専念しすぎるとそれしかできなくなるので、研究以外の活動が大事。サークルでも食事でも他者とのコミュニケーションの中でアイデアが生まれてくることもある。そのような環境が日本は少ないように思う。

5.5. 松岡 秀行氏（(株)日立製作所 基礎研究センタ 技術顧問 兼 日立東大ラボ長）：

●講演内容

松岡様の博士取得に関する個人的な経験に加えて、日立製作所が博士号に対してどのような認識を持っているか、社内での博士号取得人材に期待する職能、そして日立返仁会という日立の博士号取得者のみで構成されている会についてお話しいただいた。特に、松岡様含め日立の博士号取得者から、博士号取得者が増えることが日立研究所全体のメリットにとどまらず、個々人の対外的な評価や信頼関係に良い影響を与えるという個人的なメリットも生み出すとの意見を共有していただいたことは、博士課程の学生や今後博士を目指す修士・学士課程の学生にとって有意義な内容であった。また、日立製作所では研究部門での高

職位に就くためには博士号が必須となることや、博士号持ちの人財には早期の昇進機会が与えられるといった優遇措置が取られており、博士人財を重要視する日立製作所の姿勢が伺えた。

●質疑応答

Q. 御社は社会人博士を後押ししているとのことですが、課程博士と社会人博士で個々の特質が違うなどはありませんでしょうか？

A. ありません。研究所のマネジメントをする上で学位は必要。両社に特質の違いはなく、研究所として博士人材が必要ということです。

6. パネルディスカッション（ファシリテーター：(株)リバネス 重永美由希氏）

第3部のパネルディスカッションでは、第2部に引き続いて博士研究者・技術者にパネリストとして登壇いただき、対話形式で実際の経験やキャリアの形成について意見交換しながら討論を行った。ファシリテーターに(株)リバネス 重永美由希様を招き、参加者が気になることを質問を中心に議論を展開した。内容は以下の通りであった。

テーマ

『過去に戻ったらもう一度博士課程に進学しますか？』

ファシリテーター

株式会社リバネス 重永美由希様

登壇者

星野 友様，石濱 航平様，恩賀 万理恵様，岡本 尚也様，松岡 秀行様

討論の概要

登壇者全員がテーマについて『過去に戻っても博士課程に進学する』と回答。以下、主な議論内容と回答をまとめる。

博士号取得の利点

恩賀様の意見

- 博士課程で習得した課題解決能力が社会に出た際に役立つと実感。
- 海外では博士号を持っていることが信頼につながり、話を聞いてもらいやすい。

松岡様の意見

- 名刺に博士と記載されるだけで対外的に自信を持てる。
- 日立の研鑽プログラムでは、博士を持たない人のサポートや後継者の育成を重視。

博士課程の価値と実感

ファシリテーターから学生への問いかけ：

「博士課程で学んだことは役に立つのか実感が湧かないのでは？」

学生からは以下の意見が挙がった：

- 実感は難しいが、学会やフォーラムで企業の方と対等に話せる場面が増える。
- 社会での分析力や課題発見能力は博士課程で身につく。

岡本様の意見

- 博士課程で行う分析や図作成、学びは社会でも役立つ。
- 行政の政策決定プロセスでは、データ分析が欠けている場合が多い。博士のスキルが役立つ場面。

新しい分野への挑戦

星野様の意見

- 修士課程の学生も優秀だが、博士課程ではインディペンデンスを持つ必要がある。
- 新しい分野に進出する理由は、新しいことや人と違うことをやりたいから。
- 過去の研究は過去のもの。新しい論文を出すたびに気持ちを切り替える。

石濱様の意見

- 博士課程のテーマと企業での内容が異なるが、選択のタイミングがあるだけで、常に興味は幅広く持っている。

博士課程進学の問題と後ろめたさについて（登壇者から学生への問いかけ）

学生からは以下の意見が挙がった：

1. 周囲から進学の意義を疑問視されることが多い。
2. 社会経験がないまま 27 歳を迎える不安。
3. 日本では博士号への理解が浅く、誤解されることが多い。
4. 企業など評価者側が博士号を前向きに受け止めていない。
5. 社会に出た友人から偏見を持たれ、自己評価が低くなる。

博士課程の価値向上の提案

- リファレンスグループ（周囲の評価基準）に影響されすぎないこと。
- 博士が少ないという事実を希少価値として捉える。
- 社会全体で博士号取得者を正當に評価する仕組みの必要性。
- 博士課程進学を推奨するだけでなく、社会が受け入れる体制の構築が必要。

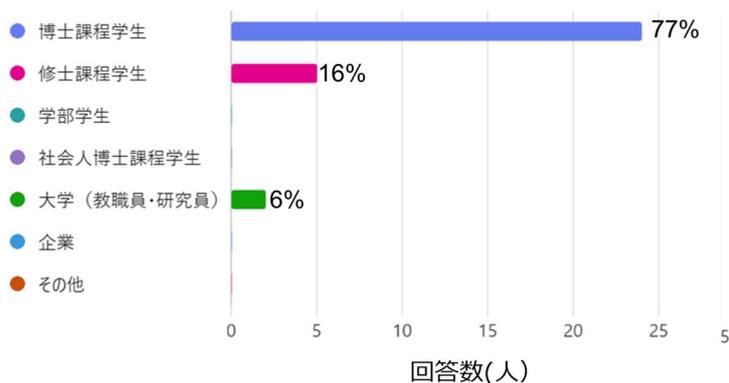
本ディスカッションを通じて、博士課程進学の問題と課題が明確化された。博士号取得は個人のスキル向上や社会貢献に大きく寄与する一方で、日本社会における認識の改善が求められている。登壇者からは、博士課程での経験が人生やキャリアにおいて重要な礎となるとの意見が多く寄せられた。全体の進行が遅れていたため本来 50 分の枠が取られていたところ 25 分ほどの時間でパネルディスカッションは終了した。

7. アンケート結果

7.1. 事後アンケート

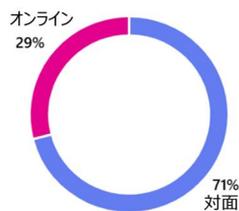
本年度のフォーラムの効果や、今後の博士フォーラム開催に関わる参考情報を得るため、参加者アンケートを実施した。有効回答数は31件であり、Q1, 2, 4-6, 8, 10, 12, 13, 15-19は回答必須とした。以下に設問と回答を記す。

Q1. 「あなたの所属を教えてください。」

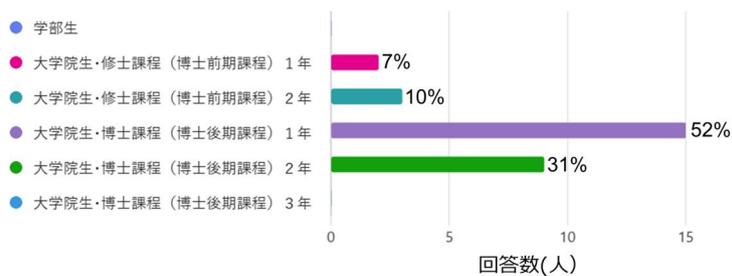


回答者の所属割合では博士課程学生が全体の約77%を占め最も多かった。また、修士・学部学生の参加も全体の約16%を占め、博士課程への進学を考える機会を提供できたのではないかと考える。

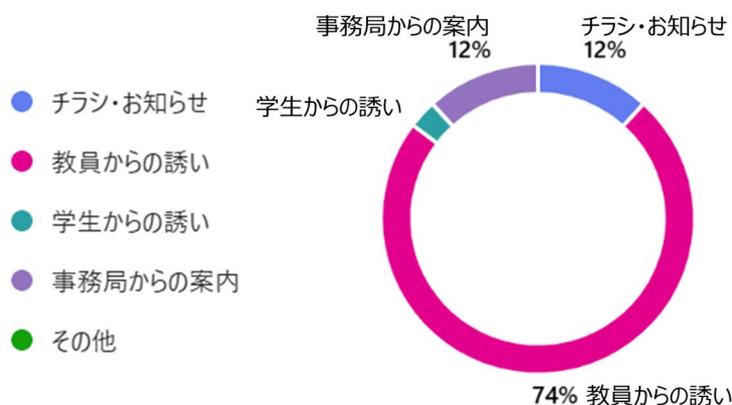
Q2. 「今回の参加は、対面 / オンラインのどちらですか。」



Q3. 「学生の方にお尋ねします。あなたの学年をお教えてください。」

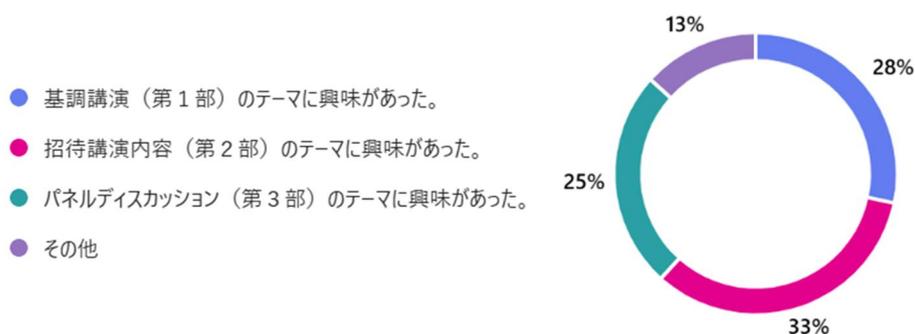


Q4. 「博士フォーラムを知ったきっかけをお聞かせください。複数回答可」

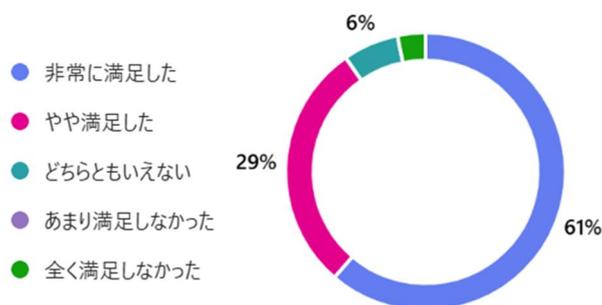


「教員からの誘い。」で本フォーラムを知った回答者が全体の 74%を占めていた。「チラシ・お知らせを見た。」は回答の 12%であり、一定の効果があったと考えられる。

Q5. 「博士フォーラム 2024 に参加した理由をお聞かせください。」



Q6. 「イベント全体の満足度をお聞かせください。」



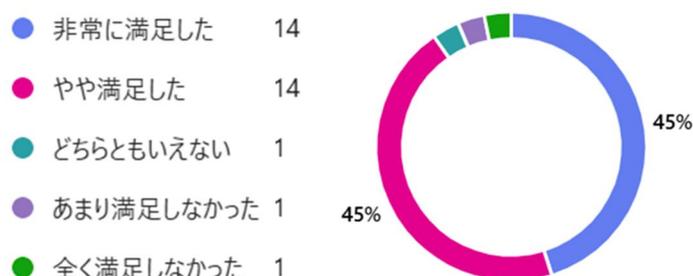
満足したという回答が全体の約 90%を占め、テーマに興味を持ち参加した参加者の多くが満足する博士フォーラムを開催できたと考えられる。

Q7. 「Q6の回答の理由をお聞かせください。」

この設問の回答は全 21 件で、以下に記載の通りであった。

- ・博士課程進学を決めたが自分の所属する研究室内では進路自体の話はあまりされておらず、博士号を取った人の様々な立場からの話は非常に参考になった
- ・博士号を持つことが自信につながると思えたから
- ・講演はよかったが、参加型ではなかったから
- ・どのご講演者の方も、本当に時間が足りないと思うほど貴重なご経験談をお聞かせくださいました。博士課程を今後頑張っていくこと、とてもエンカレッジされました。
- ・参加前は、具体的な内容が想像できていなかったが、期待を超える内容で、将来のキャリア設計の参考になった。また、博士号取得へのモチベーションにつながった。
- ・時間がタイトだったこともあるが、講演者が話すだけの一方的な講演が多くディスカッションできなかったのが残念だった。
- ・研究や卒業後のモチベーションに繋がったから。
- ・博士課程の研究だけでなく今後の人生全体を考える上で非常によい刺激となったから。
- ・公演の内容がすべて面白かった。他の博士学生との交流もためになった。
- ・博士課程の学生としての将来がどうなるのかとても不安でした。さまざまな人々の経験や、なぜ博士号取得を決意したのかを聞き、彼らが現在どれほど成功しているかを見て、私は正しい決断をしたと感じました。
- ・文部科学省の博士課程学生増加への熱意を感じられたため
- ・研究がしたかった
- ・懇親会で他校の学生と話すことができ、また博士を取られた先輩方の多様な進路を学ぶことができてよかった
- ・講演内容が興味のある内容であった。
- ・文科省の取り組みを知れたから
- ・博士取得後の働き方を学べた
- ・進路に対する考え方の幅が広がった。
- ・知り合いを作ることができたからです。
- ・多様なキャリアを持つ社会人のお話を聞けたため。
- ・有意義な話を聞けたから
- ・話がおもしろかったため。

Q8. 「基調講演（第1部）の満足度をお聞かせください。」



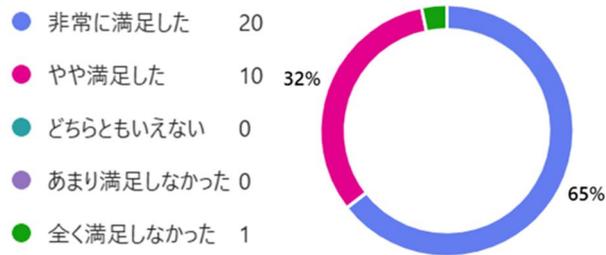
Q9. 「Q8の回答の理由をお聞かせください。」

この設問の回答は全17件で、以下に記載の通りであった。

- ・具体的な数字が示されていてよかった。
- ・博士後期課程のみならず日本の大学教育について考える良い機会になったから。
- ・博士課程の支援について、支援プログラムを構築されている方の意見を聞くのが初めてだったので、客観的な分析等が興味深かった。一方、この日本全体で意識改革を要する重要な社会課題について、博士課程を修了または在学している、すなわち、博士課程に理解がある方に対して内容を説明することに意義があるのか疑問に思った。学部生や修士学生を巻き込んだ博士課程の魅力と日本の現状を議論すべきと感じた。
- ・国の政策としてどう進めていくかの具体的なビジョンを直接職員の方から知るいい機会となった。
- ・文科省がどのような理由でどのようにして博士課程学生を増やしたり待遇を改善したりしようとしているのかを知ることができたため、簡単には予算を増やすことができない現状を現場の方から聞いてよかった。
- ・文部科学省が博士取得に対して前向きであることが分かった。
- ・知りたい情報（博士学生への支援方針など）が知れたため。
- ・博士課程に対する支援策の今後の予定等聞いたのが良かった。
- ・研究がしたかった。
- ・飛行機が遅れ参加できなかったため。
- ・講演内容が興味のある内容であった。
- ・文科省の取り組みについて詳しく説明されていたから
- ・省庁がどのような方向性でいるのか分かった
- ・国の支援についてしれてよかった。
- ・博士進学前の話が多く、進学後の話が少なく感じました。
- ・文科省の取り組みについて包括的に理解できたこと。
- ・いろいろなサポートがあることを理解できたため、ただ事前に公開されてある資料の説明もあり、直接お話が聞けるのであれば、より詳細の部分など資料一步先の話を知ることができた。

った。

Q10. 「招待講演（第2部）の満足度をお聞かせください。」



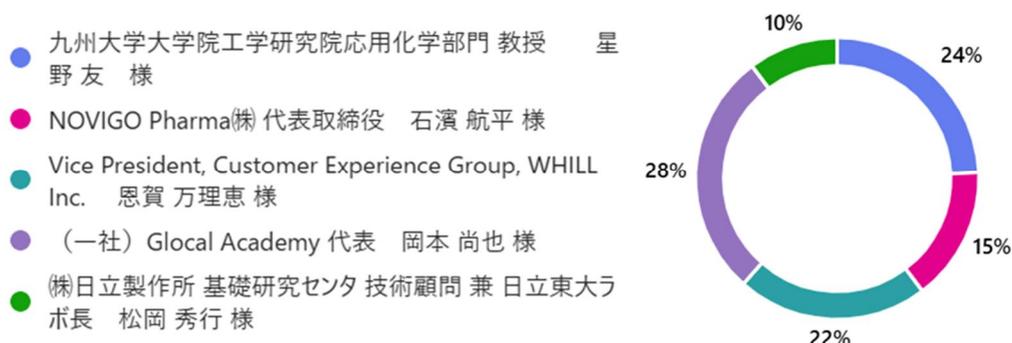
Q11. 「Q10の回答の理由をお聞かせください。」

この設問の回答は全18件で、以下に記載の通りであった。

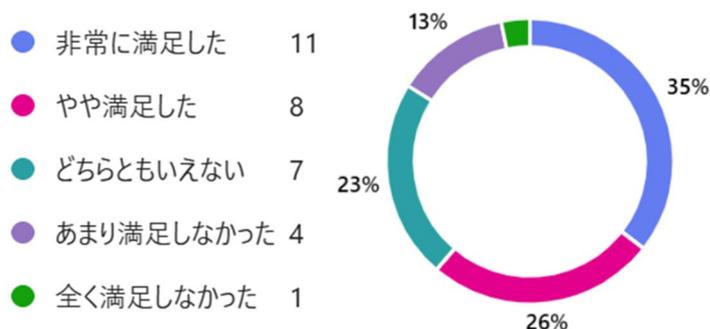
- ・思わずメモしたくなるような話が多かった。
- ・博士号を持っているから偉いという訳ではないが、博士号がないと国際的な信頼は得られないと感じ、博士への前向きな意見を多く知れたから
- ・登壇された先生方のお話が非常に興味深く、経験談、考え方として勉強になった。勇気をいただいた。
- ・講演自体はすごく参考になった一方で、パネルディスカッションを含め現役学生の意見を交えてディスカッションする時間が少なかった（1つしかとか短い質問でしたらとか急かしているようで良くない。頭が良いからといってもそんな急に質問は出てこない）
- ・非常に経歴の濃い多数の講演者が辿ってきた道を聞くだけで面白かった。講演者の方たちの今の姿をみて、博士課程を踏み台にやりたいことを躊躇せずやっていく人生に魅力を感じた。自分は博士号をとること自体が目的になってしまっている部分が少しあるなど考えさせられて、若いうちに自分が尖ることができるものを見つけたいと強く感じた。
- ・おもしろかった。
- ・多様なキャリアを持つ方の意見を聞けたため
- ・ややスタートアップ等にテーマが偏っていたが、赤裸々に様々な業界事業を聞いて良かった。
- ・研究がしたかった
- ・博士を取られた先輩方の多様な進路を学ぶことができてよかった
- ・講演内容が興味のある内容であった。
- ・卒業後の進路を考えるきっかけになったから
- ・みなさん魅力的な働き方をされていた
- ・様々なバックグラウンドを持った方で、特に普段では聞けないような話が聞いてよかった。

- ・博士課程での実際の話を知る機会が少ないので、参考になりました。
- ・多様なキャリアを持つ社会人のお話を聞けたため。
- ・恩賀様や岡本様の話が大変興味深かったです。特に岡本様は今後本学でも講演いただきたいと思いました。
- ・講演者のバックグラウンドが特殊で話がおもしろかったため。

Q12. 「学生の皆さんにお伺いします。招待講演（第2部）をお聞きし、あなたが自身の将来を考えるうえで参考になった講演者をお選びください（複数回答可）。」



Q13. 「パネルディスカッション（第3部）の満足度をお聞かせください。」



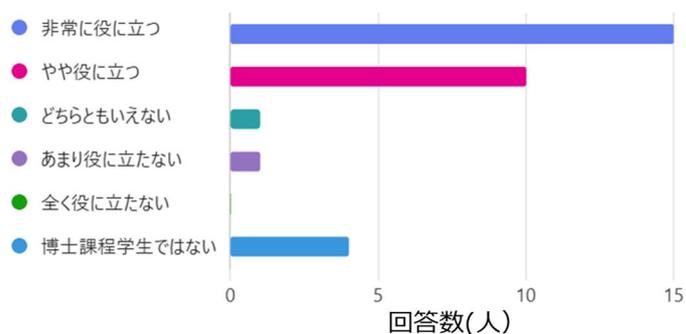
Q14. 「Q13 の回答の理由をお聞かせください。」

この設問の回答は全 16 件で、以下に記載の通りであった。

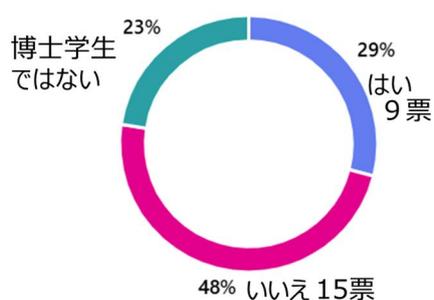
- ・途中、現役学生の声も聞けたのが良かった。そもそもパネラーとして学生がいてもいいかもしれない。
- ・博士号を持つ社会人が日本国内の地位改善について同じ意見を共有していることを知れたから
- ・時間が足りなかったから

- ・登壇者の意見が概ね同じであったため、ディスカッションの意義が薄いように感じた。また、一部の議論の内容と需要にギャップがあるようにも感じた
- ・事前に運営側で学生をセレクションしているようだったが、参加したかった。参加フォームでパネルディスカッションに参加してもいいという学生を募っても良かったと思う。
- ・パネルディスカッションでお題となった質問をただ投げかけるだけでなく、その質問の意図や背景も一緒に伝えると考案者の方々から私たちが求める回答がもらえるのかなと思いました。パネルディスカッションは話を発散させ収束させるのを数十分で実施するのは難しいとは思いますがご検討ください。とても有意義に聞かせていただきました。
- ・日本の世間になんとか蔓延る「博士の“負”のイメージ」を感じている学生が多いことを知って共感した。そもそもなぜそのような世間の認識ができてしまったのか気になる。
- ・有意義だったが、第二部の焼き直しという感覚が強かった
- ・特に聞きたいことではなかったから
- ・講演者同士で議論する場面がもう少しあると面白かったかもしれません。
- ・みなさんの考えを聞けたが、もう少し学生の質問時間が欲しかった
- ・議論の目的が曖昧であった。
- ・博士進学前の話が多く、進学後の話が少なく感じました。
- ・回していた内容が割と第二部と類似していたので、公開の質疑応答型でもよかったかなと思います。
- ・聴講できなかつたため
- ・身近なトークテーマで盛り上がったため。

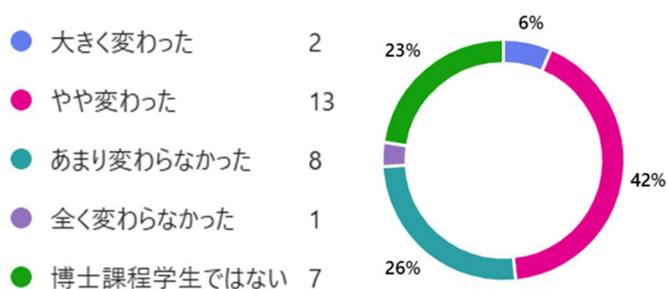
Q15. 「博士課程学生の方にお伺いします。本フォーラムは自身にとって役立つものでしたか。」



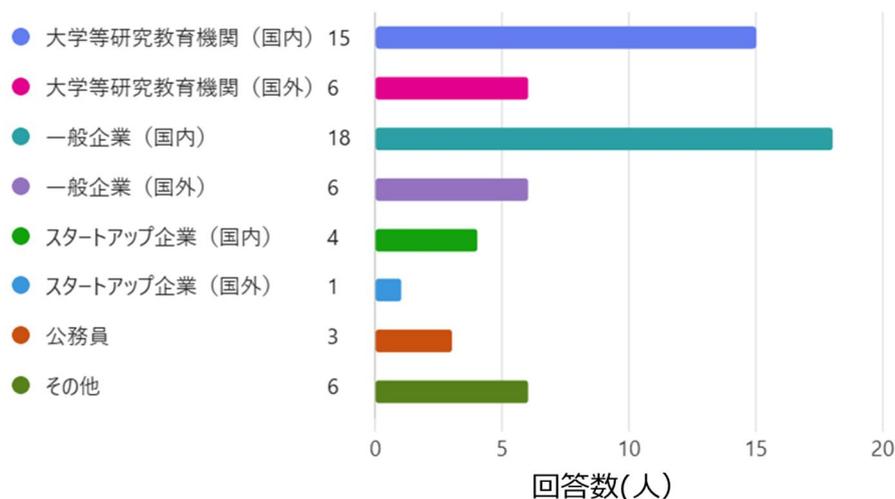
Q16. 「博士課程学生の方にお伺いします。あなたはフォーラム参加前から既に明確なキャリアプランをお持ちでしたか？」



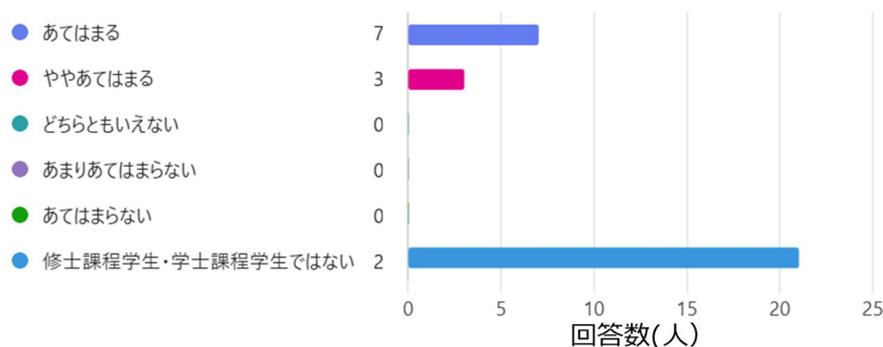
Q17. 「博士課程学生の方にお伺いします。本フォーラムへの参加により、あなたのキャリアプランに対する考え方は変わりましたか？」



Q18. 「博士課程学生の方にお伺いします。あなたが現在希望している進路をお聞かせください。」



Q19. 「修士課程・学士課程の方にお伺いします。本フォーラムを通じて、博士課程進学への興味や関心が高まったり、不安が軽減されたりしましたか。」



Q20. 「次回以降の博士フォーラムのテーマに取り上げてほしい内容があればお聞かせください。」

- ・アカハラの定義
- ・"日本の"博士人材が生き残る方法：国内の大学でも留学生の方が博士進学する割合が多い（気がする）中で日本国籍の博士人材が国内外で活躍するにはどういう特色が必要か（例：職人気質，真理を突き詰める etc.）
- ・やりたいこととやらなければいけないことへの時間・労力のかけ方のバランスについて
- ・海外での学位取得について
- ・キャリアの形成がうまく出来なかった方，どちらかといえば紆余曲折あった方の経験談。
- ・すでに博士に進んでいる学生も多かったので，博士課程の間にしてよかったことなど。
- ・博士論文の研究テーマはどう決めたのか
- ・論文の投稿計画，就活

- ・懇親会に参加しなくても他の学生と交流する機会があると尚うれしいです。
- ・海外ポスドクや国際学会など海外について

Q21. 「2024 年度博士フォーラムに関するご意見・ご感想をお聞かせください。」

この設問の回答は全 13 件で、以下に記載の通りであった。

- ・視野が広がりました。ありがとうございました。
- ・非常に興味深かったです。(特に星野先生と岡本さん) ありがとうございました。
- ・ありがとうございました。
- ・どなたも 20 代を自己投資に捧げられていて非常に羨ましく感じた。結婚、出産などのライフイベントを交えた視点で博士課程とその後のキャリアをどう設計するかという視点が必要に感じた。実際、博士課程進学に歯止めをかけている理由にライフイベントとの兼ね合いの不安があるように感じていて、重要なテーマであると思います。企画/運営大変ありがとうございました。私自身いろんな方々に出会えて刺激になりました。特に、こうあるべきという先入観に捉われず、やりたいことをとりあえず突き詰めてみればいいという考え方に胸を打たれました。
- ・とにかく時間がタイトだった。講演を午前、パネルディスカッションを午後あるいは 2 日に日程を分けるなどした方が良いと感じた。今回福岡開催だったため、九大生は参加できたが遠方開催だとオンライン参加となる学生が多くなる。しかし、現地で聞いた方が対面でディスカッション可能でネットワークも広がる。そのため、主催校またはその近隣の大学(東大&Science Tokyo or 阪大&京大)以外の参加学生に関しては宿泊費補助もしくは大学が運営するゲストハウス等の宿泊斡旋等の措置を取るべきではないかと感じた(往復交通費はさすがに負担あるいは先着制)。
- ・参加のきっかけは事務からの推薦であったが、実際に参加してみると非常に面白くためになるイベントであった。博士をただの学歴のとして考えるのではなく、人生全体の方向性をつくっていくひとつの道として考えるようになった。自分が何がしたいか、もっている技術で何ができるのかを考えていきたい。本イベント内容は多くの博士や修士、学士学生のためになると思うので、アーカイブを youtube 等で配信するとよいと思う。公開が難しければ、参加学生限定で視聴リンクをお送りいただけるとありがたい。
- ・懇親会の費用が高かった
- ・協力学生として参加しましたが、特に明確な指示がなく終わりました。明確な役割を伝えていただければと思いました。
- ・開催、運営お疲れ様でした。ありがとうございました！
- ・大変有意義な会でした
- ・運営ありがとうございました。貴重な機会を設けてくださり、ありがとうございます。
- ・とても貴重な機会をいただきましてありがとうございます。オンライン参加でしたが、リマインドやアンケートまで非常に丁寧に構成されており、企画運営面でも大変勉強に

なりました。コンテンツも非常に面白く長時間ではありましたが参加してよかったです。このような機会を設けていただき、誠に有難うございました。

8. おわりに

2024年度の八大学工学系連合会博士フォーラムでは、【博士戦略会議 2024 in Fukuoka ~辿る軌跡と切り拓く未来~】というテーマで、広い意味で博士学生個々が現在持っているであろう現状や将来のもやもや感を解消し、改めて将来の活躍への道のを考える機会とすることを目的とした。

基調講演では、博士人材の育成を支援する立場から、文科省の支援制度や博士人材への機会をお話しいただいた。続いて行った招待講演では、アカデミア、スタートアップ企業、一般企業など様々な分野において最前線でご活躍されている5名の博士号取得の先輩方に、これまで歩まれて来た道やこれからの博士への期待についてご講演いただいた。とくに後者では、非常に幅広い分野で博士人材が活躍されていること、苦労話やそれを乗り越えた経験などを知ることができ、博士人材の大きな可能性を知ることができたのではないかと思われ、アンケートでも非常に好評であった。また、パネルディスカッションでは十分な時間をとることができずに申し訳なかったが、先輩方から生の声をきくことで、もやもや感が多少は軽減されたのではないかとと思われる。

最後に、本フォーラム開催にあたり、お忙しいところ参加くださり貴重なご講演を賜りました7名の登壇者の皆さま、参加者の皆さま、関係者の皆さまに心より御礼申し上げます。

添付資料

A-1.参加者名簿

●幹事学生名簿

氏名	大学名	専攻等	課程
中西 賢斗	九州大学	材料工学専攻	博士課程
木幡 真太郎	九州大学	応用化学専攻	博士課程
金子 悠哉	九州大学	化学工学専攻	博士課程
大島 裕也	九州大学	量子物理学専攻	博士課程
藪田 真以	九州大学	船舶海洋工学専攻	博士課程
篠崎 航太郎	九州大学	地球資源システム工学専攻	博士課程
藤岡 秀二郎	九州大学	土木工学専攻	博士課程
林田 侑也	九州大学	機械工学専攻	博士課程
西川 龍	九州大学	水素エネルギーシステム工学専攻	博士課程
鎌田 祥彰	九州大学	航空宇宙工学専攻	博士課程
紙浦 欣輝	九州大学	電気電子工学専攻	博士課程
李 雪原	九州大学	情報理工学専攻	博士課程
山口 晃	九州大学	工学府田中研究室	博士課程

●協力学生名簿

氏名	大学名	専攻等	課程
LAI Lilliann Lan	北海道大学	建築都市空間デザイン専攻	博士課程
佐藤 衣吹	北海道大学	材料科学専攻	修士課程
池本 敦哉	東北大学	土木工学専攻	博士課程
PATTRAKORN NIDHINARANGKON	東北大学	土木工学専攻	博士課程
瀧澤 知樹	東京大学	大学院工学系研究科社会基盤学専攻	博士課程
伊藤 沙衣	東京大学	大学院工学系研究科バイオエンジニアリング専攻	博士課程
浅野 梨紗	東京大学	大学院工学系研究科バイオエンジニアリング専攻	博士課程
長岡 修司	東京科学大学	環境・社会理工学院 土木・環境工学系専攻	博士課程
李 承天	東京科学大学	環境・社会理工学院 融合理工学系専攻	博士課程
山川 太嗣	名古屋大学	電子工学専攻	博士課程
尾関 秀隆	名古屋大学	マイクロ・ナノ機械理工学専攻	博士課程
貴傳名 史椰	京都大学	機械理工学専攻	博士課程
赤尾 拓海	京都大学	機械理工学専攻	博士課程
伊藤 夏海	大阪大学	大学院基礎工学研究科物質創成専攻	博士課程
廣畑 佑真	大阪大学	大学院基礎工学研究科機能創成専攻	博士課程

●対面参加者名簿

氏名	大学名	専攻等	課程
風間 聡	東北大学	土木工学専攻	教授
有働 恵子	東北大学	土木工学専攻	教授
石田 哲也	東京大学	工学系研究科社会基盤学専攻	教授
仙石 慎太郎	東京科学大学	環境・社会理工学院 イノベーション科学系	教授
蓮尾 昌裕	京都大学	機械理工学専攻	教授
大政 健史	大阪大学	工学研究科生物工学専攻	教授
尾崎 雅則	大阪大学	工学研究科電気電子情報通信工学専攻	教授
山本 元司	九州大学	大学院工学研究院	教授
渡邊 聡	九州大学	大学院工学研究院	教授
末廣 純也	九州大学	システム情報科学研究院	教授
田中 将己	九州大学	工学研究院材料工学部門	教授
島田 英樹	九州大学	工学府地球環境工学科	教授
大友 陽子	北海道大学	資源循環システム部門	准教授
西野 択	東京科学大学	システム制御系	教員
小此木 大輝	東京科学大学	工学院情報通信系	博士課程
宮田 竜弥	東京科学大学	情報理工学院 数理・計算科学系 数理・計算科学コース	博士課程
Ying Chen	東京科学大学	工学院経営工学系	博士課程
中川 亮祐	東京科学大学	物質理工学院材料系	博士課程
木村 詠吉	東京科学大学	工学院	修士課程
萩原 涼	東京科学大学	情報理工学院	修士課程
市村 太一	東京科学大学	工学院システム制御系システム制御コース	修士課程
尾崎 伸一郎	九州大学	大学院工学府土木工学専攻	博士課程
三坂 真澄	九州大学	工学部	博士課程
矢野 伶	九州大学	大学院工学府材料工学専攻	博士課程
佐伯 颯斗	九州大学	大学院工学府藤ヶ谷研究室	博士課程
藤本 大貴	九州大学	工学府材料工学専攻	博士課程
小澤 陽之	九州大学	工学部航空宇宙工学科	学部生
佐藤 和宏	東北大学	工学研究科教務課大学院教務係	その他
鈴木 芳昭	東北大学	工学研究科教務課学部教務係	その他
横尾 泰之	八大学事務局		その他
安尾 千恵子	八大学事務局		その他
永島 洋子	九州大学	工学部等事務部	その他

奥 啓介	九州大学	工学部等事務部	その他
田代 正治	九州大学	工学部等事務部	その他
桑本 新吾	九州大学	工学部等事務部	その他
本田 潤	九州大学	工学部等事務部	その他
今木 隆滋	九州大学	工学部等事務部	その他
郡司嶋 智	九州大学	工学部技術部	その他
川畑 義矢	九州大学	工学部技術部	その他
徳永 瑞樹	九州大学	工学部技術部	その他
川添 かのこ	九州大学	工学部技術部	その他
今村 和孝	九州大学	工学部技術部	その他

●オンライン参加者名簿

氏名	大学名	職名・課程
服部 徹太郎	東北大学	教員
伊藤 彰則	東北大学	教員
川野 昌平	東京大学	教員
守島 利子	東京大学	教員
井上 智博	九州大学	教員
今川 晃一	東京大学	博士課程
油原 和公	京都大学	博士課程
長尾 淳平	九州大学	博士課程
深水 柝兵	九州大学	博士課程
呉 翼峰	九州大学	博士課程
川原 弘太郎	九州大学	博士課程
堤 大洋	九州大学	博士課程
佐藤 春歌	東北大学	修士課程
西島 皓平	東京大学	修士課程
西垣 晴	東京大学	修士課程
井ノ口 寛	東京科学大学	修士課程
横井 航	東京科学大学	修士課程
八尾 美沙奈	大阪大学	修士課程
森 隆典	九州大学	修士課程
森田 雅人	九州大学	修士課程
常盤 俊介	九州大学	修士課程
谷本 大航	九州大学	修士課程

高杉 一宏	東北大学	その他
藤橋 幸子	東北大学	その他
松村 沙江	東京科学大学	その他
新澤 禎彦	東京科学大学	その他
大村 雅紀	東京科学大学	その他
西澤 泉	東京科学大学	その他
宮本 裕佳	京都大学	その他
安達 淳一郎	九州大学	その他
林 萌	九州大学	その他

A-2. フォーラムの様子



全体写真



オープニング



基調講演 高見様



招待講演 星野様



招待講演 石濱様



招待講演 恩賀様



招待講演 岡本様



招待講演 松岡様





パネルディスカッション



情報交換会

A-3.周知ちらし



博士フォーラム2024



日時 2024年12月6日（金）13:00～17:00

会場 九州大学西新プラザ（福岡市早良区西新2-16-23）オンライン参加も可

現在、日本の人口100万人当たりの博士号取得者は120人程度となっており、主要国の中では日本のみ減少傾向が続いています。これを受け、文部科学省主導のもと、大学院教育の改革や学生への支援強化によって博士学生数を増やそうとする働きかけが行われています。その一方で、研究者の現状に対する世間一般の理解は十分とは言えません。また、博士学生も自身の研究の本質や社会への貢献度、その価値観がゆらぎ、博士の活動に戸惑いを感じることもあるのではないのでしょうか。更に、アカデミアへのキャリアの不安感が博士の将来の不透明さを増長させている様に感じます。

本フォーラムでは、はじめに、これからの博士への期待を軸に、博士課程学生の将来に期待し博士育成を推進する立場を代表して、文部科学省の方にご講演頂きます。つづいて、アカデミア、スタートアップ企業、一般企業など様々な分野において最前線でご活躍されている5名の博士の方に、これまで歩まれて来た道やこれからの博士への期待についてご講演いただきます。パネルディスカッションでは、講演者にパネリストとしてご登壇いただき、博士学生に必要な戦略やその後のキャリアプラン等について、聴衆も参加できるシステムに基づき、会場全体で「博士の新しい未来」に関して活発に意見交換をします。

本フォーラムを通して、博士学生の将来のますますの活躍へのきっかけを掴むことを期待しています。

プログラム（予定）

第1部 基調講演：博士人材の活躍促進に向けて

高見 暁子氏 文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課 人材政策推進室長

第2部 招待講演：博士が歩んできた道、博士への期待

星野 友氏 九州大学大学院工学研究院応用化学部門 教授

石濱 航平氏 NOVIGO Pharma(株) 代表取締役

恩賀 万理恵氏 Vice President, Customer Experience Group, WHILL Inc.

岡本 尚也氏 (一社) Glocal Academy 代表

松岡 秀行氏 (株)日立製作所 基礎研究センター 技術顧問 兼 日立東大ラボ長

第3部 パネルディスカッション：ファシリテータ 重永美由希氏 (株)リバネス

参加登録はQRコードからお申込みください

- ・ 博士後期課程学生に限らず、修士課程・学部生、教職員の皆様もお申込みいただけます。
- ・ 受付期間は11月25日までとなります。定員に達し次第、受付を終了しますので、ご了承ください。



お問い合わせ [受付時間/月曜日～金曜日9:00～17:00]

九州大学工学部等事務部教務課

TEL: 092-802-2736